それは、ある秋の日の午後。
学園から帰宅したわたしをお母さんが呼び止めた。
「あ、都。ちょっと、今から良いかしら？」
「あ、うん。いいけど……なんだかお母さん、そんなに改まって、どうしたの？」
「まあ……いいから、いらっしゃい」
「……？」
ただならぬ雰囲気をその瞬間に感じたのを覚えている。
畳敷きの客間に連れられていくと、お父さんが待ち受けていた。
いつも、仕事から帰ってくる時間にはまだ早いのに。
「ほら、都。そこに座って」
「はい」
卓を挟んでお父さんの向かい側に、言われるまま座る。
なんだか、すごく大事な話という雰囲気が、ひしひしとその時点で感じられた。
「都……」
お父さんはそのまましばし言い淀んで、でも、思い直したかのように、一つゴホンと咳払いをする。
「実は、都に……お見合いの話が来ている。本家から、嫁にどうかと……」
……お見合い……！

お父さんの口から出てきた言葉は、わたしの想像を超えたものだった。
まさか……というのが正直なところ。
ただ、14歳ともなれば、自分の家と親戚回りの関係性も、充分知っている。
うちは至って普通のおうちだけど、本家筋は長い歴史を持つ呉服問屋の家。
跡継ぎの息子の嫁は親戚筋からもらうのがしきたりになっていることはわたしも知っている。
でも、うちは身内とはいっても末席も末席。
そんな話が回ってくるなんて思ってもいなかった……。
「でも、わたしはまだ……結婚できないのに……？」
「それもわかっている。今は婚約だけでよいと言っている。ただ、もし色よい返事を貰えるようなら、早めに花嫁修業に寄越して欲しいということだ」
「それで、お父さんは、なんと返事を……？」
「とりあえず、おまえの意思を聞いてから……とは答えておいたけど……」
その先を言い淀むお父さん。
でも、少し間を置いてから、思い直したかのように。
「いや、断ってもいいんだぞ。どうせうちは親類とは言っても末席も末席。断ったところで、これ以上どうということはないからな」
そんなことを言っても、うちのお父さんだって、本家の営む呉服問屋の関連で働

いている。
　居場所がなくなる心配だって……。
「お父さん、そんなことを言って、無理してるの、わたしにだってわかるわよ……」
「俺だって気が進まないんだ。若様とおまえとでは、歳も離れすぎているしな……。都は昔、だいぶ懐いていたようだが」
「うん、あの『おにいちゃん』よね……？　小さいわたしをとても可愛がってくれたことはよく覚えてるよ。けど、どうして今頃わたしがお嫁さん候補に？　もっと、年齢の近い人とか、いなかったの？」
「それが……いるにはいたらしいんだが……なんというか、他の候補のそれぞれの家同士がお互いに牽制し合うような感じになってしまったらしくて……分家同士で次期当主夫人の座を巡って争いになってもマズいということで、早々に本家側が断りを入れたらしい」
「でもそれが、なんでわたしに決まる流れになっちゃうの？　わたしだって、身内といえば身内でしょ？」
「それはそうなんだけど、うちは序列的にいちばん末席の部類だから、あまり親類のコアの部分での力関係に影響が少ないからというのがひとつ」
「うん。他にもあるの？」
「若様にも昔懐いていたのは本家の方でも覚えていてね。ちょうどそろそろ年頃じ

ゃないの？という話になって。それなら今すぐ結婚だとちょっと早いけど、今から花嫁修業してたら結婚できる 16 歳なんてすぐだね……って話の流れで、その場で決まった話なんだ」

「そうだったんだ……」

そっか……微妙に、あの頃のおにいさんとの関係がここへ来て少しだけ影響したところもあったんだ……。

「で、都。どうする？　やっぱり、断るよな？」

お父さんが断ること前提で話を進めているところを見ると、お父さんも今ひとつ気乗りのしない話ではあるみたいだけど。

でも、わたしは……。

「お父さん、わたし、その話、受けようと思う」

「えっ……」

わたしの返答、それも受けると即答したことに、お父さんは驚いて絶句した。

「いいのか、都。若様はもう 30 になる……まだ 16 にもならない娘のおまえに、その歳の男のところに嫁に行けというのは、さすがに私も気が引ける……」

「いいの、気にしないで。これもきっと、何かの縁だと思うの。若様は優しい方だから、きっと大丈夫。それに、まだ今は見合いに行くだけ。実際に会ってみたら、やっぱり相応しくないって、向こうの家のお眼鏡に適わず破談になることだって、

あるかもしれないでしょう？」
「都……本当に、いいのか？」
お父さんは改めてわたしに尋ねる。
その表情には娘を嫁に出す父親としての苦悩と、親戚の間での立場とで揺れるお父さんの心の揺れが見て取れる。
「うん、いいよ。大丈夫、心配しないで」
「すまない……。本当なら、もっと歳相応な恋をして、好きになった相手と幸せな結婚をさせてやりたかった……」
「お父さんったら……。わたし、そんな相手、まだ全然いないわよ。それどころか、好きな人も特にいないわ」
「そうなのか？」
「そうよ。それに、素敵な出会いはどんなことからやってくるか分からないもの。もしかしたら、これが恋の始まりになっちゃうことだって、あるかもしれないわよ」
わたしの言葉に、お父さんは苦笑する。
「そうであってくれれば、いいんだけどな……」
そう言って、ふう……と、大きく息をつく。
「それにしても、けっこう都は楽天家だな……」
「ふふふっ……」

「その笑顔に、少し救われる思いだよ……」
そう言ってふっと微笑むお父さん。
その笑みは、少し淋しそうな笑顔だった。

そして、迎えたお見合いの当日。
数年ぶりに会ったおにいちゃんは、昔とあまり変わらなくて。
むしろ。
「都ちゃん、大きくなったなぁ……」
おにいちゃんの方が、わたしの成長に目を丸くしていた。
「それでは、お互い知らない仲でもないですし、あとはお若い二人だけで……」
「そうですね、我々は遠慮しましょうか」
そう仲人役の親戚のおじさまの言葉を合図に、わたしたち二人だけ、お見合いの場となった旅館の部屋を下がっていった。
部屋に、わたしとおにいちゃんと、二人だけが残る。
「……なんだか、すまないね。こんなことになって……」
おにいちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「若様、そのようなことはなさらないでください……」
「でも、僕みたいなオジサンと……見合いなんて、嫌だっただろう？」
「決してそんなことは……。むしろ、嬉しかったんです。久々に会った若様は、やっぱりあの時の優しいおにいちゃんのままでした……。会えて良かったです」
「そう……？」
おにいちゃんが、ほんの少し笑みを浮かべる。
嬉しそうに笑うその笑顔は、昔とちっとも変わらない。
「でも、さすがに結婚は考えられないでしょ？　後で、断りの連絡をするように言っておくから、今日はゆっくり、美味しい料理でも食べながら、思い出話でもしようか。せっかく、久しぶりに会えたんだし」
「あ、あの……！」
わたしは咄嗟におにいちゃんの言葉を遮るように言葉を挟む。
「若様は……わたしが結婚相手では、やっぱり不満ですよね。まだわたし、子供ですし……」
「いや、そんなことはないけど……。都ちゃん、とても綺麗な女の子に成長してて、びっくりしたよ。もう少し僕が若ければ、こっちから頭下げてでもお嫁に来て欲しいくらいだよ」
「それなら……わたし……！」

「でもね、都ちゃん。さすがに、今の都ちゃんに30差し掛かったオジサンの嫁に来てくれなんて、言えないよ。都ちゃんだって、嫌じゃないの？　もっと歳相応な恋愛だって、したいでしょう？」
若様、お父さんと同じことを言ってる。
思わずわたし、小さく吹き出してしまった。
「若様……お父さんみたいですよ……くすくす」
「まあ、そりゃあね……。歳もかなり離れているし、大人としての分別というものもそれなりにあるしね……」
そう言って、おにいちゃんは淋しそうに笑う。
「……あの、ひとつ、伺ってもよろしいですか？」
「ん？　なんだい？」
「今回、お見合いの話がわたしのところに回ってきましたけれど、若様は今まで、他にご結婚を考えたお相手とか、いらっしゃらなかったのですか？」
「あはは……ド直球に訊くねぇ」
おにいちゃんは苦笑する。
「あ、あの、お答えいただけなければそれでも構いません。ただ……若様、とても素敵な方なのに、どうして今までおひとりだったのか、不思議だったんです」
「ああ、まあ、そうか……でも、僕はそんなに素敵でもなんでもないとは思うがな

ぁ」

そして、一つ大きく息をすると、おにいちゃんはわたしの疑問に答えてくれる。

「大した話じゃないんだ。恥ずかしい話なんだけど、大学を出てから家業を継ぐために、仕事を覚えることに手一杯で……恋愛とかそういうことを考える余裕もないまま、今になってしまった。ただ、それだけさ」

「学生時代に付き合っていた方とか、いらっしゃらなかったのでしょうか？」

「そうだね……ちょっとそれっぽい感じになった人も、いるにはいたかな……。でも、うちは縁（ゆかり）のない女性との結婚はすごく難しいから……」

「そうだったんですね……。でしたら、何も恥ずかしいことはないと思います」

「はは……ありがとう、都ちゃん。でも、そうしているうちに、気が付いたらこの歳になってしまって、今度は親戚中から結婚を急かされることになってしまってさ。おかげで、都ちゃんにまで迷惑をかけることになってしまった。本当に申し訳ない」

おにいちゃんは肩を小さくしてわたしに頭を下げた。

「あの、わたしの話をしても、よろしいでしょうか？」

「ん？　ああ、もちろん。いいよ」

「わたしは、このお見合いの話を戴いた時、正直、すごくびっくりしました……」

「まあ、そうだろうね……」

「けれど、わたし……その時にまず最初に思ったことは、これは運命じゃないかっ

て、思ったんです」
　おにいちゃんは、黙ったまま、しっかりとわたしの目を見て、わたしの言葉に耳を傾ける。
「小さい頃から、ずっと大好きで、幼心に本気だったんですよ。お嫁さんになりたいって……」
「そうだったね……。会う度に何度も言われてたっけ」
「そうですよ。でも、全然本気で相手してくれないから、わたし、幼心に結構傷ついたんですよ」
「そういえば、その時都ちゃんは決まってすっごく不機嫌になって……そっか、それが不満だったのか」
「今まで気付かなかったのですか？」
「いや、ごめんね。まさか、あの歳の子が本気でそこまで思っているとは思わなかったんだ」
　おにいちゃんは、少しばつの悪い表情で、そう告白する。
　わたしはそんな鈍い「おにいちゃん」の姿に、ちょっぴりくすりと笑ってしまう。
「若様。女の子が恋心に目覚めるのは、結構早いんです」
「そうなんだね……。ごめん、気付くのが遅くて」
「いいんです。わたし、このお見合いのお話を頂いた時、だからこそ、運命を感じ

たんです。幼い頃、いつもわたしと遊んでくれた、優しいおにいちゃんのお嫁さんに、本当になれるかもしれない……そう思ったら、幼い頃の恋心がまだわたしの中に残り火のように残っていたことに気が付いたんです」
「それで、見合いを受けたというの？」
「はい」
「もう、会う機会もなくなってから、随分経つのに……そんなこと簡単に決めてしまって……意外と都ちゃん、見かけによらず向こう見ずなんじゃないの？」
「ふふふっ。わたし、こう見えて、結構思い切る時は思い切っちゃう方なんです。直感を信じちゃうというか……」
「大胆だね」
「でも、なんだか理由はよく分からないんですけど、わたしが直感で感じることって、結構正しいことが多くて。だから、わりと迷わない方ですね」
「そうなんだ。それで、その直感は今回は当たってたの？」
「当たってたと思います。昔のまま、やさしくて自分のことよりわたしのことを気遣ってくれる、素敵なおにいちゃんのままでした」
わたしの言葉に、おにいちゃんは少し嬉しそうに顔をほころばせる。
「そうか。ありがとな。久しぶりに都ちゃんに会えて、今日は嬉しかったよ」
そう言って、おにいちゃんは手を伸ばして、わたしの頭をなでてくれる。

昔、わたしが小さい頃、よくそうしてくれたように。
でも、わたしは昔、それが不満だった。
そして、今回も。
わたしは少し、頬を膨らませる。
「都ちゃんは、昔から、こうすると不機嫌だったよね」
「そうですよ。だって、これでは子供扱いですもの」
「そうか……僕にはそんなことも気付いてなかった……。確かに、無意識のうちに、子供扱いしていたんだね……子供は、誤魔化せないというけど、本当だね……」
「そうですよ、なんとなく分かっちゃうものなんです」
「あはは……参ったな……」
おにいちゃんは苦笑する。
「話が逸れましたけど、若様は昔と変わらず、思った通りの方で……この人なら、わたし、好きになれると思いました。わたしは、本気です……」
「都ちゃん……」
しばらく、おにいちゃんはわたしを凝視する。
それから、ゆっくりと、今までよりも低いトーンで言葉を継いだ。
「都ちゃん、きみ、うちの一族のしきたりは知ってる？」
単なる確認という意味だけではない意味を含んでいることは、なんとなくわたし

にも、その声のトーンの変化で分かった。
「婚約したらすぐに花嫁修業に入るんですよね？」
「その花嫁修業の意味まで、ちゃんと知ってる？」
「それって、一緒に住み込んで、お店の仕事や家事全般、作法の諸々を教わるんですよね……？」
「うん、間違いではないけど、それだけの意味じゃない」
「それって、花嫁修業の段階から、旦那様になる人の身の回りのお世話をする……という、あれですか？」
「花嫁修業だけど、基本的にもう破談を前提とはしないからね。だから、もうこの段階から本当の夫婦として生活する……そういうことなんだ」
ハッキリそれと告げられるのはこれが初めてだけど、お見合いの話があってから、諸々話を今日の段階まで進めていく段階で、わたしにもなんとなく、わかっていた。
「……あんまり驚かないね」
わたしの様子を見て、おにいちゃんは少し驚いた様子だった。
「わたし……朝から晩まで、寝食を共にして身の回りの世話をするっていう話までは聞いていましたから、もしかしたら……と」
「なるほど、勘が良いね」
「それに、わたしも女の子ですから。いずれ結婚することが前提となれば、そうい

うことも……あるって……」
恥ずかしくて顔が赤くなるのが自分でも分かる。
でも。
「でも、わたし、大丈夫です。若様がわたしのことを気に入ってくださるなら、わたし、がんばりますから……」
「こんな、もう30になるオジサンと、エッチなこと、するんだよ？　ホントに良いの？　赤ちゃんつくったりするんだよ？」
「はい、わかっています……」
「こんなおっさんに、裸にされて、身体中撫で回されて、舐め回されたり、そういうこと……なんだよ？」
「あんまり生々しいこと、言わないでください、恥ずかしいですから……」
「ごめん。でも、僕は、都ちゃんがいいって言ったら、そういうことをするの、止められない。だって、こんなに綺麗に可愛い女の子目の前にして、そこまで僕も、理性を保てないから……」
わたし、その言葉にとくんと胸が大きく鷲掴みされたみたいに脈打った。
正直、怖い……と思ったけど。
でも……わたし……。
この人になら……。

わたしは、覚悟を、決めた。
漠然とした「お嫁さん」としてではなく。
目の前の、昔、小さな胸をときめかせた、優しい「おにいちゃん」だけではない、一人の男性と、身体を張って向き合う覚悟を。
正直言えば、不安はある。
でも、きっと、大丈夫。
だって、この人は、昔の「おにいちゃん」と同じ、優しくてわたしのことをいつでも思いやってくれる、そんな人だもの。
「わたし、それでも……いいです。さすがに、舐め回されちゃうとか、恥ずかしくて死んじゃいそうですけど……若様のために、がんばります……」
「いいの？」
わたしは、静かに一度、こくんと頷く。
「若様が可愛がって……愛して下さるなら、わたし、がんばれます。ですから……」
「うん……」
わたしの次の言葉を待つ若様。
わたしは、座卓から少し横の位置にずれると、居住まいを正してから。
「末永く、可愛がって下さいませ……若様」
畳の上に三つ指をついて、おにいちゃんにお辞儀をする。

すぐに、彼が近づいてくる気配と足音。
すっと、わたしの前に屈んだのがわかる。
おにいちゃんは、そっとわたしの手を取ると、その取った手を引いてわたしを起こす。
わたしの目と、お兄ちゃんの目が、まっすぐ合う。
「都ちゃん、ホントに、僕で……いいんだね？」
「はい。不束者ですが、どうか、よろしくお願いします。若様」
「いや、むしろ、こちらの方こそ、よろしく、だよ。都ちゃん」
そう言って、そのままおにいちゃんは、わたしを抱きすくめる。
「大切にするよ、絶対に……」
「はい……！」
わたしも、そっと、おにいちゃんの身体に腕を回す。
彼の身体の感触を確かめるように。
……うん、怖くない。
おにいちゃんがわたしを抱く腕の感触がとても優しい。
すごく、抱かれていて安心する……。
うん、やっぱり、昔と全然変わらない。
わたしが憧れたおにいちゃんが、そこにいた……。

「若様……」
わたしがおにいちゃんをそう呼ぶと。
「都ちゃん、その呼び方なんだけど……」
遮るように、おにいちゃんが言葉を挟んだ。
「はい……？」
「『若様』はやめにしない？　これから夫婦としてやっていくんだし、他人行儀過ぎる気がして」
「あ……」
でも、昔みたいに「おにいちゃん」と呼ぶのも違うよね。
だとしたら……。
「それじゃあ……あの、だ…ダンナ様……で」
「ありがとう。これからはそれで」
「はい。……では、わたしからも、一つ、いいですか？」
わたしも、おにいちゃん……ううん、ダンナ様の奥さんになるわけだから……子供扱いはもう終わりですよね。
「ダンナ様も、わたしのことは、これから『都』と、呼び捨てで」
「うん、そうだね。じゃあ、都」
「はい」

「これから、よろしく」
「わたし、頑張ります」
ダンナ様とわたしと、自然と目が合って、自然とお互いに笑みを浮かべる。
そんな、わたしとダンナ様との間に甘い空気が流れたところで。
コンコン。
旅館の部屋のドアをノックする音で、わたしたちは弾かれるようにパッと離れた。
「どうぞ」
ダンナ様の声で、ドアが開いて、ダンナ様のお母様が入ってきた。
「嘉章さん、どうなりました？　話はできましたか？」
「はい、いろいろと思い出話に花が咲きました。な、都」
「はい」
笑顔でわたしが頷くと、その空気感に、お母様も何か感じたようだった。
「あらあら……。二人とも仲良さそうね」
「うん、まあ……」
ダンナ様が少し照れ混じりに答える。
すると、お母様は、わたしの方に向き直って。
「都さん。息子との縁談、承諾していただいたということで……よいのですね？」
「はい。未熟者ですが、どうかいろいろお教え下さい。よろしくお願いします」